

### 美を日本作家の手にそっと

ここ数年、日本文学が大型書店の文学の棚を埋めるようになってきました。最初1面だったのが何本にもなったのはこの3~4年のことです。内容の幅もごく広く、詩歌と散文から推理小説まであり、絵本や漫画もかなりあります。読者層は書店で読書し、本を買うほぼすべての層を網羅しており、老若男女を問わず心が満ち足りた様子です。

日本の文学にはどうしてこれほど魅力があるのでしょうか。さんざん悩んで頼りない結論にたどり着きました。日本の作家の多様性が理由なのでは。私がよく読んできた作家だけでも、川端康成、三島由紀夫、太宰治、松本清張、東野圭吾、辻村深月、伊坂幸太郎……どの名前も心に浮かべると、それぞれに独立独歩したイメージが脳内に溜まってきます。川端康成と三島由紀夫は興味津々で文学の理念を探求し、太宰治はその傍でのぞき見えています。三島由紀夫の激しく刺さる視線と嫌悪する口元に怯え近づけずにいます。松本清張と東野圭吾は慌てることもとろとろすることもなくテーブルを探し、2人それぞれが片側に着席してゆっくりと社会派と本格派の相違と融合する道について雑談を始めます。辻村深月と伊坂幸太郎は特にこだわりなく、手近な席に座って、伏線、多い視点からのエピソード、推理小説での反転の応用などなどやりとりを……ときどき伝わる笑い声で空間全体が楽しみにあふれているイメージです。

思わず面白い幻想を続けてしまいました。ではもし同じテーマを彼らに出したら、彼らはどんな作品にしてくれるでしょうか。テーマには文学界の昔からの命題「美」が一番ですね。

川端康成ならどう書くでしょうか。島村が目にした「娘の顔のただなかに野山のともし火がともった時」、それとも初春の「若葉の匂いの強い裏山」と「首に杉林の小暗い青が映るやう」でしょうか<sup>1</sup>。

三島由紀夫ならば、言うに及ばず金閣です。雪中の金閣が「細身の柱を林立させて、すがすがしい素肌で立っていた」か、台風の前「月は鏡湖池の藻のあいだにかがやき、虫の音や蛙の声があたりを占めている」か、それとも放火前の「柿葺の屋根の頂き高く、金銅の鳳凰が無明の長夜に接している」<sup>2</sup>か、きっと彼もたいへん困惑することでしょう。

太宰治が美を語るというともまず思い浮かぶのが中国ではおなじみの「新しく手に入れた夏向きの浴衣」<sup>3</sup>でしょう〔日本語原文に該当の表記はありません〕。結局、美のために半年もの苦痛を我慢しています。もしくは「この淡い牡丹色の毛糸と、灰色の雨空と、一つに溶け合って、なんとも言えないくらい柔かくてマイルドな色調」<sup>4</sup>のセーターでしょうか。「本当の貴族」の母の手によるもので、そのグラデーションは天地の自然美を明らかに示しています。

残る推理作家はまだどんなご高見を発表するでしょうか。松本清張は照子と耕作が森鷗外の足跡を追って入った山林を持ち出すかもしれません。「道の両側は落葉がうず高く積

って、葉を失った裸の梢の重なりから、冬の日射しが洩れ落ちていた。足の不自由な耕作は、てる子に手をとられていた。柔らかい、やさしい指だし、甘い匂いも若い女のものだった。」<sup>5</sup>と書いています。

東野圭吾は彼の作品中で少し呼応するくだりがあるのを思い出し、微笑して賛成の顔を見せるはずです。数学教師の石神が自殺しようとしたとき隣に引っ越してきた親子がチャイムを鳴らすので中断され、ドアを開いた瞬間、美に貫かれたのでした。「何という奇麗な目をした母娘だろうと思った。それまで彼は、何かの美しさに見とれたり、感動したことがなかった。芸術の意味もわからなかった。だがこの瞬間、すべてを理解した。数学の問題が解かれる美しさと本質的には同じだと気づいた」<sup>6</sup>。

少し若い世代の辻村深月と伊坂幸太郎は推論を口々に言い続けます。「大安の日起きること全部でしょう？」<sup>7</sup>辻村が先に声を上げます。「むしろ美は人知れぬ小島で生まれるはずだと思いますけどね」<sup>8</sup>伊坂は弱みを見せたくないようです。「日の入りの頃？」「そう、鳥がいて案山子があつて。」「それなら明るく笑う人たちもいるはず！」<sup>9</sup>「ああ、それじゃそういうことで。」

もちろん以上すべて私が読書から得たものによる想像です。現実の中で一度も会ってない作家が文字の力だけで読者の脳裏の中で生き生きとしていられるのは、文字の魅力だと言わざるを得ません。これほど鮮明な作者のイメージを描けるのは、日本の文学、日本の作家の特徴のためです。

彼らは文中に自分のすべてが現れることを恐れませんが、死生観、審美観、人生観、価値観……中でもよく話題になるのは死生観と審美観です。第二次世界戦争の後、米国の文化人類学者が『菊と刀』という日本の国民性を分析する専門書を出版しました。「菊」は彼らの落ち着いたもの静かさ、芸術と美を愛する姿を指しますが、同時にその性格には「刀」もかなりあります。好戦的でしかも時にひどく変態なのです。もちろん多少は一方的な考えですが、同時に啓発性をかなり備えています。

もし自分が違う物事を使ってその国民性を述べるなら、「桜と刀」を選ぶでしょう。

桜は最も日本を代表する花で、毎春の花期いっぱい続く花見は日本人がほぼ必ず参加する集団活動です。家族、友達、同僚と桜を囲んで座り、満開の桜は風の中で四方に散り、一部は落下して一部は流れて行き、もののあはれの美を詳しく徹底的に演繹します。彼らは花火や散る桜のような「盛者必衰」を好みます。また謹んでわびさびの原則に従う茶器と庭のような「はかなさ」と「不揃い」も好みます。しかし矛盾性はそのとき現れていて、彼らは仏ではなく、本当に縁や定めに従い受け入れることができずに、「刀」の一面が顔を出します。きわめて鋭い、自分を犠牲にする方法でたいへんな、はかない美を守ろうとするのです。日本作家にもっと悲しい、もっと景色に関わる風格は求めようがありません。彼らは美を尊重しつつ率直に言うことをよしとせず、ただ周囲を巡って、最も天然で最もなめらかな自然の景色でくるみ、婉曲な言葉の修飾で転々と表現し、ほんの少しの余分な、好感の呼気で美しい風格と趣を吹き散らすことをひどく恐れます。困難も、悲し

みもそうです。

だから、美は是非そっとぜひ彼らの手に乗せてください。

読んだ本は『雪国』、『金閣寺』、『人間失格』、『斜陽』、『或る「小倉日記」伝』、『容疑者 X の献身』、『本日は大安なり』、『オーデュボンの祈り』など。  
参考文献なし。

<sup>1</sup> 出典は川端康成『雪国』。

<sup>2</sup> 出典は三島由紀夫『金閣寺』。

<sup>3</sup> 出典は太宰治『人間失格』。

<sup>4</sup> 出典は太宰治『斜陽』。

<sup>5</sup> 出典は松本清張『或る「小倉日記」伝』

<sup>6</sup> 出典は東野圭吾『容疑者 X の献身』。

<sup>7</sup> 辻村深月『本日は大安なり』を指しており、ある大安の日にとある結婚式場で何組かの人物が起こした物語を描いています。

<sup>8</sup> 伊坂幸太郎作品『オーデュボンの祈り』の物語の舞台、荻島を指しています。

<sup>9</sup> 『本日は大安なり』と『オーデュボンの祈り』の結末の場面を指しています。